

女子サッカー選手のスポーツキャリアパターン

—日本女子サッカーリーグ選手について—

前田 博子*, 川西 正志*

A Study on the Sport Career Pattern of Women Football Players in Japan.

Hiroko MAEDA* and Masashi KAWANISHI*

Abstract

The purpose of this study is to investigate the Sport Career pattern of the women football player. A postal survey was conducted the 134 players belonging to the Japan Ladies Soccer League in 1993. The survey consisted of 35 items about their sports activity up to that time. Data obtained from the questionnaires were analyzed on its beginning, continuation and discontinuance, and the place of their activities.

The result indicated that junior high school aged players have little place to continue football, especially at school. That is:

1. 55.2% of players begin in primary school. But not a few (31.9%) stop in Junior high school.
2. Most players tend to play outside of school, especially in junior high school (95.1%).

KEY WORDS: *Sport Career Pattern, Women football player, Beginning, Continuation, Discontinuation.*

緒 言

近年、生涯スポーツと言われるように多くの人がスポーツに関心を持つようになってきている。それにつれ、参与形態も様々な形が見られるようになり、スポーツ活動を開始する時期も学齢期のみならず成人後や高齢になってからということも珍しくない。一方、発育発達の時期により学習にレディネスがあることはよく知られている。最適な時期に行うことによって、初めて最大の効果を得ることができる訳である。従って競技力の

面から見ると競技を開始する時期は重要であり、パフォーマンスが最大に発揮されるのにも最適な時期があるが、これらは種目により異なっているようである。例えば代表選手を見ると、一般に体操や競泳の選手は年齢が低く、射撃や馬術の選手は年齢が高い。また、競技種目によって性差が大きいものとあまり見られないものがある⁶⁾。これらは、種目により最高のパフォーマンスを発揮するために要求される生理的適性や心理的適性もしくは社会的適性等の相違によるからであろうが、単に種目特性によるものなのか社会環境等の

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

結果であるのかは明らかではない。ただ、各々のスポーツキャリアを調査してみると、種目や競技レベル等によってある特定のパターンが見られると思われる。

以上のような背景から、これまでもスポーツキャリアパターンについてはいくつかの研究がなされてきた。例えば、オリンピック代表選手、アジア大会代表選手、国体選手等の調査研究など、調査対象者のレベルを一流競技者とした研究がある^{6) 7) 13) 19) 23)}。これらの研究では、一流競技者の社会背景、競技への参加年齢等のキャリア、競技活動の場(所属機関)等が明らかにされてきた。この中で種目差について取り上げているものは少なくないが、レベルを特定しているためサンプル数が少なく、研究の中心的課題とはされていなかったり、非常に過去のものであったりと、現時点では深い知見を得ることはできていない。ただ、種目により特徴的なキャリアパターンが見られることは間違いなくと言えるであろう。特定の種目に注目した研究としては、スピードスケート選手のキャリアの研究がある^{3) 10) 11)}。これは、スピードスケート活動の継続、転向、脱退に焦点を当て、他種目との関わりも含めてその傾向を明らかにしている。しかし、この競技の盛んな特定の地域に限定して調査されているため、種目全体の特徴とは言いがたい。キャリアパターンのひとつである、競技からの離脱に焦点をあてた研究は少なくないが、バーンアウトという心理面を捉えたものが多く^{17) 21) 26)}、ドロップアウトなどの行動自体に着目した社会学的研究は少ない¹⁾。海老原は、スポーツキャリアを分析する視点として、1) スポーツ種目、2) スポーツ活動における所属機関、3) 指導者を挙げている⁹⁾が、ここでは3)に関して指導体制という視点も含めた競技レベルとしたい。

本研究では、種目は女子のサッカー、競技レベルは日本女子サッカーリーグ選手とし、サッカーを中心としたスポーツキャリアについて活動の所属機関を含めて調査を行った。女子のサッカーは男子と比較して競技者や大会数などの量的には大きく遅れをとっているが、96年のアトランタオリンピックに採用され、昨今注目を集めている。こ

れまで女子のマラソンや柔道などは、オリンピック種目に採用されてから飛躍的に競技者が増えており、サッカーも今後が期待される。また、現時点での選手育成や普及における最大の問題点として、中学生年代の競技環境が指摘されている^{16) 22)}。小学生で素質のある選手が辞めてしまうということも、現場でよく聞かれる。日本リーグでプレーしている、いわば成功している選手にこのような状況がどう反映されており、何が原因であるのかをそのスポーツキャリアから明らかにすることが可能かもしれない。

本研究の目的は、女子のサッカー選手のスポーツキャリアを専門種目の開始、継続、離脱およびそれらの活動における所属機関について検討し、そのパターンを明らかにすることである。

方 法

本研究では、我々が実施した「一流スポーツ選手のスポーツキャリアに関する調査」によるデータを用いた。この調査はバレーボール、バスケットボール、サッカー、ヨット、漕艇の選手を対象とし、35項目からなるものであるが、本研究ではそのうち女子サッカー選手のスポーツ経験とスポーツ活動における所属機関に関するデータを用いた。

調査対象は1993年度日本女子サッカーリーグ所属チームの選手、調査時期は1993年11月から12月、調査方法は郵送による質問紙法を用い、各チームの代表者を通して選手への配布および回収を依頼した。回収は日本リーグチーム10チーム中9チームから得られ(90%)、配布数200票に対して有効回答は134票(67.0%)であった。

結果および考察

(1) 競技開始との関わりについて

① 競技開始

日本女子サッカーリーグ選手がサッカーを開始した時期は表1のとおりであった。まず、小学校年代から始めている者が55.2%と最も多かった。高校年代26.1%、高校卒業後11.2%と高校年代から後に開始した者が37.3%と、遅く始めた者も少

なくなかった。最も少なかったのが中学校年代の7.5%であった。従って競技開始の時期は、小学校年代の早い時期と、高校年代の遅い時期とに二分されることがわかった。

表1 専門競技の開始時期

| | (N) | (%) |
|-------|-----|-------|
| 小学校年代 | 74 | 55.2 |
| 中学校年代 | 10 | 7.5 |
| 高校年代 | 35 | 26.1 |
| 高校卒業後 | 15 | 11.1 |
| 計 | 134 | 100.0 |

緒言で述べたように、種目により競技開始年代は異なり、一般に小学校年代から始める早期開始種目、中学校年代から始める中期開始種目、高校年代もしくはそれ以後から始める後期開始種目に大きく分けることができる。そして、代表選手などの高レベルの選手の多くもその時期に開始している。中期や後期開始種目においても、通常より早くから開始している代表選手などが見られるが、興味がなくなったり障害を起こしたりの離脱者はあるが、早く始め、長く続けている選手がよりレベルの高い選手になりやすいのは自明であろう。日本女子リーグ選手は小学校年代の開始者が最も多いので、中学校年代、高校年代と年代が上がるにつれて、日本リーグ選手になる者は徐々に減少していくパターンが予測される。しかし、実際は中学校年代より上の高校年代、次いで高校卒業後の年代の方が開始者が多かった。これより女子のサッカーでは、特に中学校年代に競技を開始するために望ましくない状況があると考えられる。

さらに、これをアジア大会代表選手の調査²⁴⁾と比較して見た。この調査では、第9回(78年)および第11回(86年)の水泳、体操、サッカー、卓球、テニス、バスケットボール、ホッケー、陸上、ハンドボールの9種目の選手を対象としていた。これによると、早期開始種目にあたる、水泳、体操、サッカー、卓球では、不足した人材を補足するように中学校年代の開始者が2番目に多く見られた。ただこの中で唯一、86年のホッケーには中

学校年代に始めた選手が最も少いという、女子サッカーに近い傾向が見られた。この種目は高校年代に開始する者が多い後期開始種目であり、小学校年代から育成された数名の選手が代表選手に入ったという状況が考えられるが、中学校年代には競技を開始することが難しい状況があると思われる。

②競技の継続

日本女子サッカーリーグ選手の小学校から高校年代までのスポーツキャリアパターンをまとめたものが図1である。図から、サッカー実施者は中学校年代に最も少ないことが目につく。このデータの調査対象は現在のサッカー実施者であるが、その過程でサッカーから一時的に離脱する時期を経ている者が少なくないということである。これがより明白になるよう、小学校年代の開始者と中学校年代以降の開始者とを分けて示したものが図2, 3である。

小学校年代の開始者のうち、68.1%がキャリアを継続しており、残り31.9%が中学校年代で他種目に転向していた。このうちの78.3%は高校年代にサッカーを再開していたが、そのまま他種目を続けていた者も見られた。一方、①で述べたように中学校年代での開始者は少ないが、すべて以後継続していた。

一般に小学校年代に多くの者が経験する種目では、適性の高い能力のある者や強い関心を持つ者が継続していき、残りの者は主に中期や後期開始種目へ移っていくか、スポーツ活動を辞めてしまうと考えられる。海老原がスピードスケートの盛んな地域において行った調査で、この過程が明らかにされている⁷⁾¹⁰⁾。調査の性質上サッカーに再転向した者だけがここに取り上げられているので、実際はスケート同様小学校年代に開始した選手が他種目に移っているのが主流であり、一時的な離脱を経過して再開する選手は数少ない例であるのかもしれない。しかし、現在日本リーグでサッカーを行っている選手の、小学校年代の開始者のうち31.1%が一時的な離脱を経験していること、さらに全体からみてもこの率は17.2%となり、

前田, 川西：女子サッカー選手のスポーツキャリアパターン

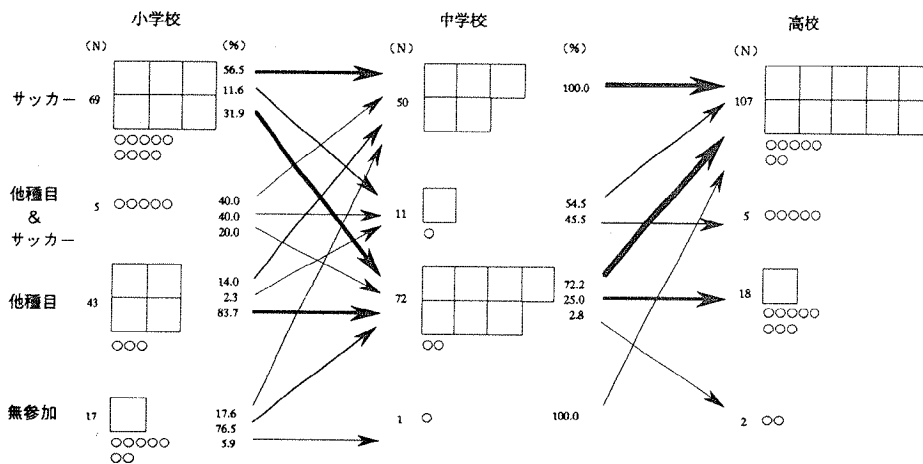


図1 女子サッカー選手のスポーツキャリアパターン (1)

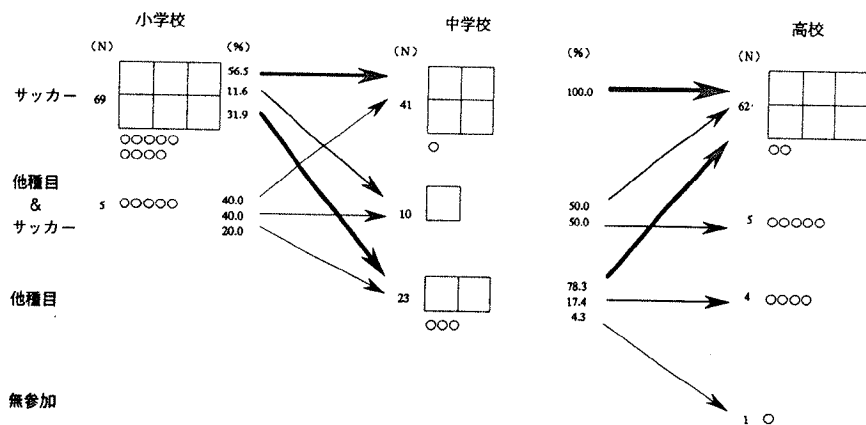


図2 女子サッカー選手のスポーツキャリアパターン (2)

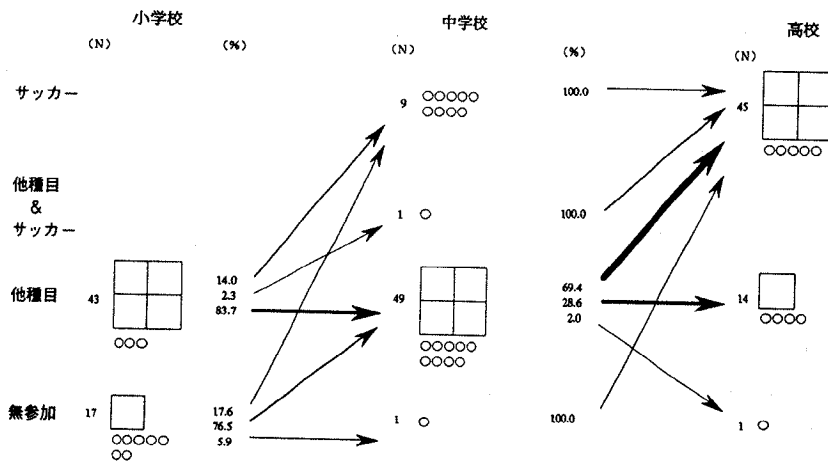


図3 女子サッカー選手のスポーツキャリアパターン (3)

無視することはできないであろう。

この事実から、女子のサッカーは一時的な離脱が起り易い、または他種目に参加しても再開しやすい状況があると言えるだろう。

③競技の専門化

図1に示したように、サッカーへの参加形態にはサッカーのみに参加する単一参加と、サッカーと他種目に同時に参加する重複種目参加が見られた。海老原は専門種目の単一参加を競技種目への専門化とみなしており、その前の状況としてア)無参加、イ)他種目参加、ウ)専門種目と他種目との重複種目参加、エ)他種目の重複種目参加、をあげている¹⁰⁾が、エ)はイ)に含むことが可能である。従って、サッカー選手のスポーツ実施状況には、この3つにサッカーへの専門化を加えた4つの状況が見られる。図からそれぞれの状況における移動を見ることができる。ここで目につくのは、専門化した後に他種目へ移動する状況であるが、これについては②で述べた。そこで、ここでは小学校以後の無参加および他種目参加から、重複種目参加からの専門化について着目した。

まず、サッカーを行っていない状況の無参加と他種目参加からの専門化は、①の内容に近いが、それぞれに分けて見ると次のことが言える。すなわち、無参加からの専門化であるが、中学校年代から3名(2.2%)、高校年代から1名(0.7%)と非常に少なく、それまでに何らかのスポーツに関わる経験を持った、他種目参加からの専門化が主流であることがわかる。

次に重複種目参加からの専門化であるが、一般に単一の種目を決定する過程で複数の種目を同時に行い、その中から最適と思われる種目を選んで専門とすることが予想される。従って重複種目参加者は年齢が上がるにつれて減少すると考えられ、スピードスケート選手の調査ではこの状況が明らかにされている¹⁰⁾。アジア大会代表選手の調査でも、重複種目参加は高校年代ではほとんど見られないが、小学校高学年から中学校にかけて常に10%前後存在していることが報告されている⁹⁾。ここでは小学校年代3.7%、中学校年代8.2%

と低い値ではあったが、中学校年代に最も多かったこと、高校年代でも小学校年代と等しい3.7%が見られたことが特徴的であろう。

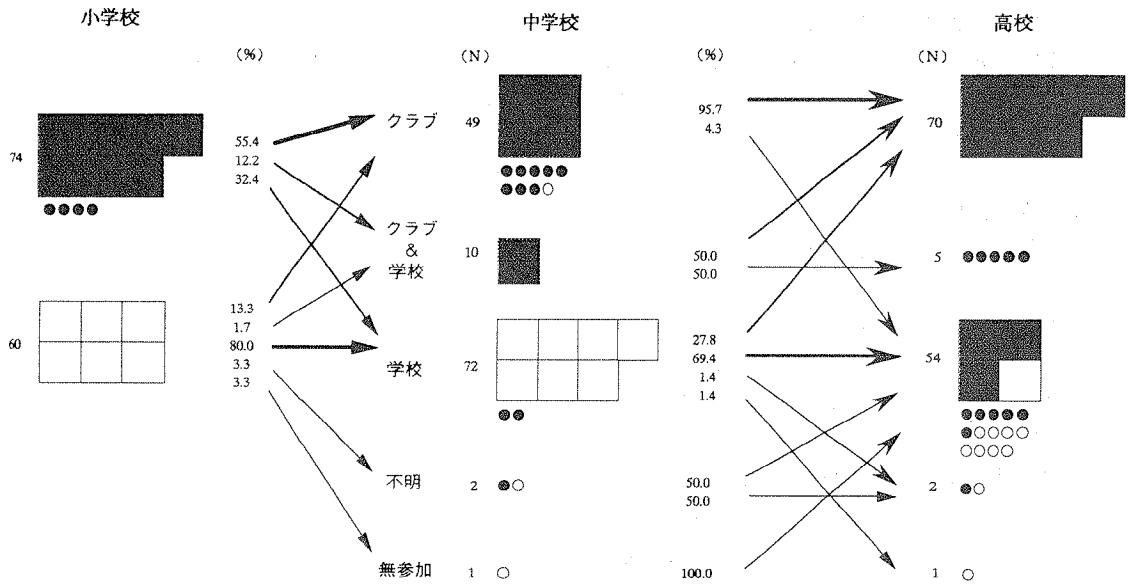
これらから女子のサッカーは、高校年代においても重複種目参加しやすい競技であると言える。これは同時に、遅くまで専門化しにくい競技であるとも言えよう。

(2) 競技活動における所属機関

図4は中学校、高校におけるスポーツ活動の所属機関であるが、黒く塗って表しているのがサッカーをしている者である。また、学校とは学校運動部であり、クラブとは学校以外の組織である。小学校では、学内の施設で活動していても学校とは関わりのない組織であるということがしばしば見られ、選手自身には判別が難しいと思われることから、今回は取り上げなかった。ここで目につくのは、クラブで活動していた者が多いことである。さらに、サッカーはクラブで、他種目は学校でという状況が見られ、特に中学校年代においてはこれが顕著であった。また、重複種目参加者に関しては、すべてがクラブでのサッカーと学校での他種目であった。

中学生年代では学校運動部に所属する者は2名、3.3%とわずかであるが、高校年代ではクラブよりは少数であるが32.1%見られた。これらの者のスポーツキャリアを見るとサッカー未経験者が75.0%を占めていた。従って高校での学校運動部所属者だけを見ると、サッカーは女子にとって後期開始種目であるように見える。さらに19.4%が一時離脱者であった。この点からは、学校運動部に女子の参加可能なサッカー部があれば、継続者は増加するのではないかとと思われる。

水上らの国体出場選手を対象にした調査では、中学校年代で学校所属77.3%、クラブ所属10.4%、高校年代で学校所属83.5%、クラブ所属9.8%と圧倒的多数が学校運動部に所属していた²⁰⁾。また、植松らのサッカー選手のデータによると、クラブ所属経験は大学生(体育専攻および体育会所属)にはほとんど見られなかったがアジア大会代表選手にはより多く見られた²⁵⁾。しかしそれらは少数



(黒色はサッカー参加者を表す)

図4 女子サッカー選手のスポーツ活動所属機関

表2 大学生およびアジア大会代表選手のスポーツ活動所属機関 (植松らを一部変更)

| | アジア大会代表選手 | | 体育会および体育系大学生 | |
|--------|-----------|-------|--------------|-------|
| | 中学生 (%) | 高校 | 中学生 | 高校 |
| クラブ | 5.3 | 5.3 | 3.5 | — |
| クラブ・学校 | 15.8 | 21.1 | 10.7 | 6.1 |
| 学校 | 78.9 | 73.7 | 85.8 | 93.9 |
| 計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

者であり、それ以外の多くの選手が学校運動部に所属していることも同時に示されていた。

サッカーにおけるクラブの存在であるが、Jリーグが始まったことにより、昨今注目を集めている。Jリーグチーム認定の条件に、下部組織としての小学校・中学校・高校年代のチームを持つことが定められたからである。従って他種目に比較して競技環境が整備されており、活動の場として選択する者が少なくないと考えられる。図5はJリーグ1チームのトップチームに現在登録されている選手の、中学、高校年代でのサッカー活動の所属機関を表している。このチームの下部組織は20年近い歴史があり、Jリーグ入りを目指して急遽作られたものではないが、それでもクラブに

所属していた選手の割合は女子選手よりはるかに少ない。Jリーグ選手全体を見ても、高校年代にクラブに所属していた選手は9.9%にしかすぎない¹²⁾。

これらのことから、女子選手はサッカーをクラブに所属して行うことが多く、特に中学校年代においては学校運動部に所属して行う者は非常に少ない。しかし、中学、高校年代におけるスポーツ活動は、学校運動部に所属して行うのが一般的である。従って、中学校で学校運動部を選択することが、サッカー経験者の専門競技からの一時離脱を意味していた。高校では逆に学校運動部がサッカー開始や再開の場となっていた。また、所属機関に重複参加することによる継続は、クラブでの

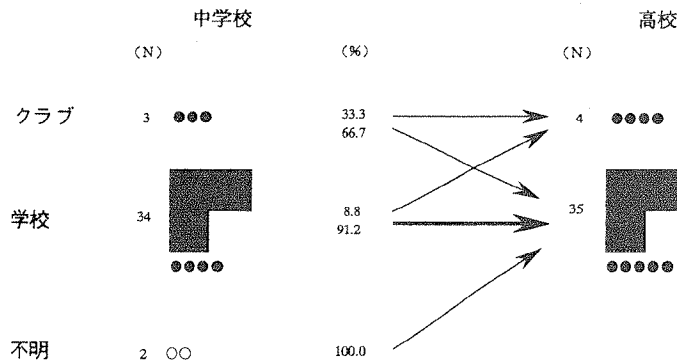


図5 Jリーグ選手のスポーツ活動所属機関

サッカーと学校運動部での他種目であり、学校運動部が盛んな中学校、高校年代の継続方法のひとつであると思われた。以上から、中学校年代の学校運動部のあり方が女子選手のサッカー継続に大きな影響を与えていることが示唆された。

結 語

日本女子サッカーリーグ選手の専門競技活動を中心としたスポーツキャリアパターンを次のようにまとめることができた。

1. 最も多く見られたパターンは、小学校年代に開始し、クラブに所属してサッカーを継続するものであり、全体の37.3%を占めていた。また、小学校年代からの継続者のクラブ所属率は98.0%に達していた。
2. 小学校年代に開始して、中学校年代に学校運動部で他種目を開始することで一時的に離脱し、高校年代もしくはそれ以降に再開するパターンは17.2%であった。このうち30.4%は高校の学校運動部で再開していた。
3. 中学校年代まで他種目をしており、高校年代もしくはそれ以降に開始するパターンは36.6%であった。このうち28.6%は高校の学校運動部で開始していた。
4. サッカーと他種目との重複種目参加は中学校年代に最も多く見られ(8.2%)、小学校年代と高校年代とが同率であった(3.7%)。すなわち、年代が上がっても重複種目参加しやすい、もしくは遅くまで専門化しにくいことがわかった。

以上の点から、中学校年代にサッカーを継続する環境および開始する環境が整っていないこと、特に学校運動部が不足していることが、日本女子リーグ選手にも大きな影響を与えていることがわかった。この影響は、ア)競技開始年代の遅れ、イ)サッカーキャリアの一時中断、ウ)専門化の遅れであった。

女子のサッカーの今後の発展方向として、上記の状況を踏まえて学校運動部が増加することが予測される。また、Jリーグの動き等から、中学校、高校年代にクラブでスポーツを行うことが一般化していき、女子のサッカー選手も中学校年代にクラブを選択して、より継続者が増えるのではないかとと思われる。これらを明確にしていくためには、さらに小学校年代の経験者全体に対する調査や高校年代の開始者に対する調査等を行うことが必要と思われる。

参考文献

- 1) 海老原修 (1988) 組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究. 体育・スポーツ社会学研究7:107-129.
- 2) 海老原修 (1990a) ジュニア・スポーツ選手のスポーツキャリアに関する研究. 平成元年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. V スポーツタレントの発掘方法に関する研究-第1報-, Pp. 8-14.
- 3) 海老原修 (1990b) ジュニア・スピード・スケーターのスポーツキャリアに関する研究. 平成元年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. VI 競技力向上に関するスポーツカリキュラムの研究開発-第2報-, Pp. 191-197.

- 4) 海老原修 (1990c) スポーツ・ドロップアウトとスポーツ・トランスファーに関する研究 第41回体育学会大会大会号, P. 126.
- 5) 海老原修 (1990d) 一流競技選手になったスポーツ少年団経験者のスポーツ・キャリアの特徴 (1). スポーツ少年270: 3-6.
- 6) 海老原修 (1991a) 一流競技選手のスポーツキャリアに関する研究: その1. スポーツ機関への所属パターンについて. 指導者のためのスポーツジャーナル 136: 32-37.
- 7) 海老原修 (1991b) 一流競技選手のスポーツキャリアに関する研究: その2. 参加パターンとトランスファー(種目変更)・パターンについて. 指導者のためのスポーツジャーナル137: 32-35.
- 8) 海老原修 (1991c) 一流競技選手になったスポーツ少年団経験者のスポーツ・キャリアの特徴 (2). スポーツ少年271: 4-7.
- 9) 海老原修 (1991d) 一流競技選手のスポーツ・キャリアの特徴に関する研究. 平成2年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. V スポーツタレントの発掘方法に関する研究-第2報-, Pp. 8-14.
- 10) 海老原修 (1991e) ジュニア・スピード・スケーターのスポーツキャリアの特徴について-地域別, 性別にみる継続, 転向, 脱退のパターン分析-. 平成2年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. VI 競技力向上に関するスポーツカリキュラムの研究開発-第3報-, Pp. 164-171.
- 11) 海老原修 (1992) ジュニア・スピード・スケーターにみる継続, 転向, 脱退の背景. 平成3年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. VI 競技力向上に関するスポーツカリキュラムの研究開発-第4報-, Pp. 149-155.
- 12) Jリーグブックス (1993) Jリーグ全選手名鑑. 小学館.
- 13) 糸野豊 (1981) 一流選手の社会的背景と選手養成をめぐる問題. 日本体育協会監修・勝部篤美・糸野豊編 コーチのためのスポーツ人間学. 大修館書店. Pp. 324-338.
- 14) 前田博子 (1991) 競技選手の受ける援助に関する研究. 第11回サッカー医・科学研究報告書, Pp. 47-48.
- 15) 前田博子 (1993a) エリート選手への援助制度に関する研究 (I). 体育・スポーツ科学 2: 25-31.
- 16) 前田博子 (1993b) 日本女子サッカーの歴史社会学-学校における活動を中心に. サッカー医・科学研究14 (印刷中).
- 17) 松尾哲矢・多々納秀雄・大谷善博・磯貝浩久・舟越美津 (1990) スポーツ競技者のバーンアウトに関する実証的研究-スポーツ少年団員をめぐる-. 日本体育学会第41回大会号. P. 127.
- 18) 三菱自動車フットボールクラブ (1993) RED DIAMONDS OFFICIAL HANDBOOK 1993. 三菱浦和フットボールクラブ
- 19) 水上博司・荒井貞光・東川安雄・沖原謙・谷口勇一 (1993a) 競技スポーツ選手の<場>のキャリアパターンについて. 第44回体育学会大会号, P. 138.
- 20) 水上博司・荒井貞光・東川安雄・沖原謙・谷口勇一 (1993b) 競技スポーツ選手の<場>のキャリアパターンについて. 日本体育学会第44回大会 体育社会学専門分科会発表論文集.
- 21) 中込四郎・岸順治 (1991) 運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究. 体育学研究35: 313-323.
- 22) 日本サッカー協会 (1994) 鈴木保・日本女子代表監督に聞く-日本女子サッカーの現状と未来②. J. F. A NEWS. 118: 14-16.
- 23) 菅原禮 (1984) わが国における一流競技選手の社会学的研究. 体育とスポーツの社会学. 不昧堂出版. Pp. 113-125.
- 24) 植松秀也・海老原修 (1991) 一流競技選手のキャリアパターンに関する比較研究-第9回・第11回アジア大会日本代表選手を対象として-第42回体育学会大会大会発表資料.
- 25) 植松秀也・海老原修 (1992) 一流競技選手のスポーツ所属機関に関する研究-アジア大会代表選手と体育専攻・体育会所属大学生との比較より-. 第43回体育学会大会大会号. P. 159.
- 26) 吉田毅 (1989) 大学競技者におけるバーン・アウトの発生機序に関する事例研究-特に指導者との相互作用に着目して-. 体育・スポーツ社会学研究8: 183-207.